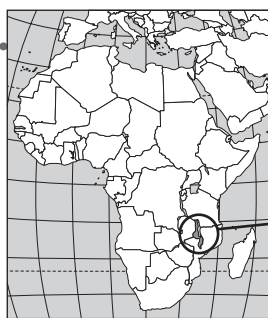


# ユニセフ子ども物語

地球に生きる子どもの暮らし

Republic of Malawi

マラウイ共和国



地図は参考のために掲載したもので、国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません

## お母さんがわりは13歳

13歳のエネリスは朝早く起きて家事をしています。家の中や外をほうきではいてきれいにしたり、ゴミを捨てたり、水をくみ、火をおこしてお湯をわかしたりするのです。しばらくすると、妹のジュリアと、ドロシーがねむい目をこすりながら起きてくるので、お湯で妹たちの体を洗ってあげます。

家には、お父さんとお母さんの姿はありません。ふたりとも1年くらい前にエイズが原因で亡くなってしまったのです。エネリスは小学校をやめて、幼い妹たちとおばあさんの世話、家事、畑仕事をしなくてはならなくなりました。妹たちに朝食を食べさせて学校や幼稚園に送り出す姿は、お母さんそのものです。



エネリスは畑でとうもろこしやかぼちゃをつくっています。とうもろこしは粉にして主食のシマ(とうもろこしの粉をお湯で練ってつくるもの)をつくります。かぼちゃはおかずにしたり、おやつにして食べたりします。また週に数回、エネリスは1時間ほど歩いたところにある市場でかぼちゃを売って、妹たちの大好きな小魚やトマトを買ってきます。

2005年にマラウイはひどい旱魃(かんばつ)に見舞われ、深刻な食糧不足になりました。



エネリスの畑もほとんど枯れてしまいました。しんせきの人たちや、村の人たちから食べ物を分けてもらい、妹たちにやっと食べさせることができたのですが、ひもじく、とてもつらい思いをしました。

エネリスは、お母さんが亡くなるまで学校に通っていました。「勉強はおもしろかったし、友だちと遊ぶのは楽しかった！私は先生になるのが夢なの…」学校のことを思い出すと、エネリスはさびしい気持ちがこみあげてきます。

お父さんとお母さんの命をうばったエイズ。エネリスはHIV/エイズについて学校で学んだことがあるので、病気を防ぐ方法を知っています。「私は絶対に感染しないように気をつけるし、妹たちにも感染してほしくない。それは、お母さんの願いだったの。お母さんは亡くなる前に『エネリス、あなたなら大丈夫。ジュリアたちを立派に育てていけるわ。自信を持って、妹たちの世話をしてね』って言ったの。だから、二人がちゃんと学校に行って、立派なおとなになってくれることがわたしの願いなの」

今、エネリスを支えているのは亡くなったお母さんの言葉と、学校での楽しい思い出と、先生になる夢です。



〈文・構成：(財)日本ユニセフ協会〉

アフリカ南東部の内陸国。北海道と九州を合わせた広さの国土に40あまりの民族、約1,260万人がくらしています。国土のほとんどが高原で、湖や川がたくさんあります。特に、国土の15%以上を占めるマラウイ湖があるマラウイ湖国立公園は世界遺産に指定されています。近年、旱魃(かんばつ)などのために食糧の収穫量が激減しており、2005年には大統領が食糧危機に対する緊急宣言をしました。

# 子どもたちだけの家族を守る

## 子どもが大黒柱—孤児たちのきびしい生活

人口1,260万人のマラウイで、HIV/エイズによって一方もしくは両方の親を失った子ども(0歳~17歳)は推定55万人にのぼっています。親をエイズで失った年長の子どもには、「家族を守って生きていく」という大きな重荷がのしかかります。同じようにエイズを発症した家族を看病したり、幼いきょうだいの世話や家事をしながら、生きるために働かなくてはならず、多くの子どもたちが学校をやめざる



家族のために水くみをする女の子  
©日本ユニセフ協会

をえないのです。

HIV/エイズに対する偏見や差別は、守ってくれる人を失った子どもたちに向けられます。子どもたちはさまざまな虐待や搾取、貧困な

## 子どもによるエイズ教育活動「エイズTOTOクラブ」

マラウイでは、若者にHIV/エイズが急速に広がっていますが、若者たちは感染の拡大を食い止める鍵もにぎっています。ユニセフは、学校の学習や課外活動などを通じて、子どもたちにHIV/エイズに対する正しい知識や予防の方法を伝えたり、無料のカウンセリング、感染検査、コンドームの提供など若者へのHIV感染予防支援を行っています。

特に、学校での活動は全国的に活発で、小学校の84%がエイズ教育を強化するための『エイズTOTOクラブ』を設置しています。『エイズTOTOクラブ』は、子どもたちが主体的に活動しているグループで、演劇や歌を通して、同世代の若者やコミュニティの人たちに、HIV/エイズについての正しい知識を伝えています。このパフォーマンスはとても好評で、毎回たくさんの人が見に来ます。身近で行われるこうした機会を活用してHIV/エイズを理解してもらい、正しい知識を広げ、偏見や差別を減らしていくことがねらいです。



「エイズTOTOクラブ」のパフォーマンス。ユーモラスな歌や劇でHIV/エイズについての正しい知識を伝えている。非常に人気があり、村中の人びとが夢中で見入っている ©日本ユニセフ協会

### マラウイの子どもの状況

(より詳しい統計は「世界子供白書2007」をご覧ください)

項目	マラウイ	日本
5歳未満児死亡率 (1,000人あたり、2005年) [人]	125	4
子どものHIV/エイズ感染者推定 人数(0~14歳、2003年) [人]	91,000	統計なし
おとなのHIV有病率 (15歳~49歳、2005年末) [%]	14.1	0.1
平均余命(2005年) [歳]	40	82
国民総所得(2005年) [米ドル]	160	38,980

などに直面することになり、教育や医療、そのほかの基本的な社会サービスを受けられないきびしい生活となっていきます。

## 孤児たちへのコミュニティの取り組み



コミュニティの中につくられた孤児たちの保育園  
©日本ユニセフ協会

エイズが原因で孤児となった子どもたちがきびしい状況に陥った時、子どもたちを守る大きな役割を果たしているのは、「コミュニティ(同じ地域に住む人びとや、同じ部族の人びと)」です。

ユニセフは、村長や、部族の長老といったコミュニティのリーダーたちに、HIV/エイズという病気について正しい知識を持ってもらう活動を支援しています。リーダーたちが積極的に対策に取り組むコミュニティでは、子どもたちは偏見や差別がない環境で、人びとに守られ安心して生活することができます。ユニセフは、子どもを守るためのコミュニティの主体的な活動も支援しています。



たびたび食糧難に陥るため、保護者たちが協力して、交代で学校で給食をつくって提供している。給食の成果で学校に通う子どもが増えた。教室が足りず、校舎の外で学習する子どもたち ©日本ユニセフ協会

## 子どものエイズ患者の困難な現実

子どもは、HIVに感染してからエイズを発症するまでの期間がおとなより短いため、体の抵抗力が弱くなるとエイズの発症によって命を失う危険が高くなります。薬の治療を受けられれば、エイズを発症しても長く生きることができるのですが、2005年にマラウイで抗レトロウイルス治療を受けたエイズ患者のうち、子どもはわずか5%でした。子ども用の薬は供給量が少ない上に価格が高く、世界中で不足しているのです。ユニセフは、これまで以上にマラウイ政府と協力し、子ども用の薬の供給量を増やしたり、薬の配布拠点を拡大し、子どもたちへの配布支援を全力で進めていきます。

“Unite for Children, Unite Against AIDS”(子どものために、エイズと闘おう)を合言葉に、ユニセフは2005年10月から「子どもとエイズ」世界キャンペーンを開始し、子どもたちへの理解と支援の強化を広げています。詳細は各資料をご覧ください。

- ユニセフ・ニュース208号、209号、210号(余部には限りがあります)
- TNET通信34号
- 日本ユニセフ協会ホームページ

<http://www.unicef.or.jp/campaign/051025/index.html>

